

St. Luke's International University Repository

Summary of curriculum comprehensive evaluation from 2000 to 2004 Part 1: Evaluation every four years.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 及川, 郁子, 菱沼, 典子, 亀井, 智子, 長江, 弘子, 射場, 典子, 有森, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/488

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

2000年度から2004年度カリキュラム総括評価 - その1 4年ごとの評価より -

及川 郁子¹⁾ 菱沼 典子²⁾ 亀井 智子³⁾
 長江 弘子⁴⁾ 射場 典子⁵⁾ 有森 直子⁶⁾
 (聖路加看護大学2005年度カリキュラム検討委員会)

Summary of Curriculum Comprehensive Evaluation from 2000 to 2004 Part 1 : Evaluation Every Four Years

Ikuko OIKAWA, R.N., M.N.¹⁾ Michiko HISHINUMA, R.N., M.S.²⁾ Tomoko KAMEI, R.N., Ph.D.³⁾
 Hiroko NAGAE, R.N., M.N.⁴⁾ Noriko IBA, R.N., M.N.⁵⁾ Naoko ARIMORI, R.N., D.N.Sc.⁶⁾
 (St. Luke's College of Nursing Curriculum Examination Committee of 2005)

[Abstract]

General evaluations of the curriculum at St. Luke's College of Nursing are conducted every four years. As part of this process, curriculum evaluations were conducted by graduating students, faculty members and the supervisors of past graduates in March, 2005. Results of the evaluations showed that the 70 graduating students were generally satisfied with the curriculum with the exception of the cultural studies subjects. Answers collected from the 29 faculty members showed that they approached their own subjects with enthusiasm however satisfaction levels with the entire curriculum were low. The answers collected from the nine supervisors of first year graduates indicated that there was not a significant change in the characteristics of the students compared with the previous intake however the low number of responses collected posed a problem. This is the tenth year since the start of the current curriculum and based on the results of the evaluations, there is a need for review.

[Key words] curriculum, comprehensive evaluation

[キーワード] カリキュラム, 総括評価

[抄 録]

本学では4年ごとにカリキュラム総括評価を実施しているが、その一部として、卒業時の学生、教員、卒業生の上司によるカリキュラム評価を2005年3月に実施した。卒業時の学生70名は、本学カリキュラムに対し教養科目群を除きおおむね満足している結果であった。教員は29名からの回答があり、担当科目にやりがいをもって取り組んでいたが、カリキュラム全体の満足度は低い結果であった。卒業後1年目の職場上司9名の回答では、前回と比較し卒業生の特性に大きな変化はなかったが、回収数の少なさが問題となった。現在のカリキュラムを開始して10年が経過したが、総括評価の結果をもとにカリキュラムの見直しを図っていく必要性が示唆された。

-
- 1) 聖路加看護大学 小児看護学 St. Luke's College of Nursing, Child Nursing
 2) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 3) 聖路加看護大学 老年看護学 St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing
 4) 聖路加看護大学 地域看護学 St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
 5) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing
 6) 聖路加看護大学 母性看護学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery

I. はじめに

本学では1995年に現在のカリキュラムを始めて以来、カリキュラムの適切性を検討するために「カリキュラム評価システム」に基づきカリキュラム評価に取り組んできている。今年度（2005年9月）2回目の総括評価を実施したので、その結果を報告する。4年ごとに実施する総括評価は、毎学期ごとに行う科目評価、実習評価に加え、4年ごとに実施する卒業時の学生による評価、教員のカリキュラム全体に対する満足度、卒業生1年目の上司からの特性評価などを合わせ、カリキュラムの課題や方向性を検討していくものである。本稿では、4年ごとに実施する評価を中心に述べ、学期ごとの科目評価、実習評価については、その2、その3で述べることにする。

II. カリキュラム評価の経過（表1）

はじめに、これまでのカリキュラム評価の経過を述べる。現在のカリキュラムが開始されると同時にカリキュラム評価が行われ始めた¹⁾。カリキュラム評価会や報告会、看護教育カリキュラムの専門家を招聘してのカリキュ

ラムセミナーなど、全教員の精力的な取り組みを通して、カリキュラムの枠組み、評価内容、評価方法等が検討され、2001年3月に「カリキュラム評価システム」の答申が出された。現在のカリキュラム評価は、この「カリキュラム評価システム」に基づいて行われている。2001年9月に1回目の総括評価を行い、専門科目（看護）の履修時間を1年次に増やすこと、実習科目の履修時期を変更することなどが検討され、2003年度より一部改正したカリキュラムを実施している。その後もカリキュラム検討委員会が中心となってカリキュラム評価を進めるほか、全学専任教員の参加によるFD研修会を通して、教員のカリキュラムに関する意識を高めることやカリキュラムの課題を検討してきている。

III. 評価内容と方法

はじめにも述べたように、ここでは4年ごとに実施する評価について述べる。

1. 卒業時の学生によるカリキュラム評価

卒業時の学生によるカリキュラム評価は、卒業時の特

表1 カリキュラム評価の経過

1995年4月	現行カリキュラムを開始し、カリキュラム評価も同時にスタート カリキュラム報告会、カリキュラム評価会を毎学期ごと実施
2001年3月	「カリキュラム評価システム」について答申
2001年9月	第1回カリキュラム総括評価会を実施 カリキュラム評価の枠組みに沿って総括評価を行い、一部改正への提言を行う
2001年11月	カリキュラム運用委員会に具体的変更に関する資料を提示
2001年12月	(FD研修会) 2003年度からのカリキュラム一部改正への実現に向けて検討 合意事項 カリキュラムの一部改正を2003年度より適用する 看護援助論Ⅳの開講時期の変更 臨地実習はGを含めすべて3年後期に実施 総合実習は4年前期に終わらせる 実習の変更に伴い、科目の順序性を考慮する 教養科目の開講時期を広く設ける
2002年3月～5月	臨地実習に関する検討会（実習担当者）を5回実施
2002年5月	カリキュラム運用委員会で臨地実習の方法について合意を得る
2002年9月	(FD研修会) 2003年度の改正について具体的に提示し変更内容を合意する
2003年4月	2003年度入学生より改正カリキュラムを開始 改正に伴うカリキュラム評価のための学生ヒアリングを開始
2003年7月	「看護学統合カリキュラムの評価 - 学生と教員が共に共有するラーニングパスの導入」をテーマとして特色ある大学教育支援プログラムへ応募
2004年3月	(FD研修会) 「現行カリキュラムのめざしたものと現在、そしてどこへ向かうのか」 検討事項 実習全体のレベル目標の検討（領域による均衡化をはかる） 科目群と科目コンテンツの整理（学生にゆとりをもたせる） 効果的な演習方法の検討 教授方法（自分で考え学ぶ力を強化する） 教養科目の位置づけ 現行のカリキュラムを踏襲しつつも、コンテンツの整理や、演習などを組みやすいカリキュラムに変更する意見が出された
2004年度	実習レベル目標の検討と合意、科目コンテンツの検討などを実施する
2005年9月	(FD研修会) 第2回カリキュラム総括評価会の実施

表2 学生の卒業時の特性評価の平均値

評価項目	2004年度 (N=70)	2000年度 (N=55)
1. 人間愛の精神に基づいて、さまざまな文化背景の人々を理解する態度をもっている	2.88	2.93
2. 人々に共感をもって接することができる	3.18	3.06
3. 自己を見つめることができる	3.26	2.89
4. 自律的に行動することができる	2.97	2.72
5. 物事への関心を深めることができる	3.11	2.81
6. 幅広く学問を探究できる	2.62	2.42
7. 批判的に物事を考えることができる	2.70	2.57
8. 対象の状況を判断し、ニーズを把握できる	2.99	2.40
9. 対象の状況に応じた援助を計画できる	3.01	2.50
10. 対象のニーズに応じて看護技術を安全に提供できる	2.68	2.23
11. 対象者とのコミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる	3.04	2.66
12. 自分の看護実践の過程を評価できる	2.84	2.59
13. 看護職としての倫理観を持ち、対象者を擁護することができる	3.21	2.98
14. 看護チームのメンバーとして自分の役割を果たすことができる	2.78	2.49
15. 他のヘルスケアチームのチームメンバーと連携をとり、協働することができる	2.56	2.20
16. 国内外の社会や経済の動きを敏感に捉え、看護への影響を考えることができる	2.49	2.28
17. 保健医療・福祉システムの中で責任を担うことができる	2.47	2.15
18. 継続学習の必要性を感じ、自己研鑽しようと思っている	3.25	2.81
19. 職能団体や学会に参加することは重要であると考えている	2.73	2.69
20. 看護の専門職性および看護学の発展に寄与しようとする意欲をもっている	2.90	2.38
全体平均	2.88	2.59

表3 卒業時の学生のカリキュラム満足度平均値

項目	2004年度 (N=70)	1999年度 (N=52)
教養科目	2.73	3.1
基礎科目	3.81	3.2
専門科目	4.33	3.7
実習科目群	4.23	3.6
総合看護・看護研究Ⅱ	3.87	3.9
図書館	3.57	3.4*
コンピュータルーム	4.20	
アーツルーム	3.87	
学内行事	3.89	3.7
課外活動	3.49	3.3
健康管理関係	4.09	質問項目なし

*1999年度は図書館・コンピュータルーム・アーツルームなどの施設を一括して学習資源として質問している

性に関するアンケート(20項目 質問内容は表2参照 4段階 かなり身につけている～身につけていない)からなるものと、4年間を通してのカリキュラム全体に対する評価である。カリキュラム全体に対する評価は、総合看護・看護研究Ⅱと関連科目について(本稿では結果を割愛)、科目群や施設・設備等の満足度に関するもの11項目(質問内容は表3を参照)で5段階評価(不満足～満足)のもの、授業全体の評価10項目(質問内容は表4参照)、教育支援状況の評価9項目(質問内容は表5参照)からなっている。

2005年3月に卒業予定の学生82名に配布し、70名からの回収(回収率85.3%)を得た。

2. 教員によるカリキュラム評価

教員による評価は、担当科目の状況(質問内容は表6参照)10項目の4段階評価(全くそう思わない～大いにそう思う)と、カリキュラム全体に対する満足度からなり、教員個々が回答する形になっている。満足度は10段階評価(全く満足していない～大いに満足している)である。調査は、2005年2月の時点で在職していた専任教員49名に配布し、29名より回答(回収率58%)を得た。

3. 卒業生の上司による評価

この評価は、卒業後1年を経過したところに所属している職場の上司や指導者等を対象として「卒業生の特性」に関する評価を行うための調査である。質問内容は23項目(表8参照)で、“大変そう思う”～“そう思わない”の4段階評価からなっている。調査方法は、卒業生に調査目的を記した依頼文と上司宛依頼文・調査用紙を送付し、卒業生から直接上司等に調査を依頼する形をとった。上司らは卒業生から調査協力の依頼文と調査用紙を受け取り、個別任意の郵送回収とした。調査は、2005年2月に実施したが、2004年3月に卒業した学生79名に配布し、回収は9名(回収率11.3%)のみであった。

IV. 結果

1. 卒業時の学生の評価

表2のように、学生が卒業時に身につけている特性として認識している項目で高いのは、「3: 自己を見つめ

表4 卒業時の学生による授業評価の回答率

評 価 内 容	2004年度 (N=70) %		2000年度 (N=55) %	
	当てはまる	当てはまらない	当てはまる	当てはまらない
1. わかりやすい授業が多い	62.8	11.4	61.8	5.5
2. 教材がよく研究されている授業が多い	68.6	11.4	60.0	5.5
3. 専門的な知識が身につく	91.5	2.9	81.9	5.4
4. しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業が多い	44.3	15.7	25.4	40.1
5. 一般教養的な授業が充実している	20.0	45.7	23.1	50.0
6. 語学教育が充実している	30.0	38.6	32.7	25.0
7. 情報処理関係の教育が充実している	17.1	31.4	7.6	47.2
8. 自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある	67.1	7.1	89.1	1.8
9. 選択できる授業科目が豊富に用意されている	34.2	37.1	38.1	29.2
10. シラバスと実際の授業の内容はよく運動している	71.4	2.9	63.7	5.4

表5 教育支援に対する卒業時の学生の肯定的評価の回答率

評 価 内 容	2004年度 (N=70) %	2000年度 (N=55) %
1. コンピュータルームの故障に対する対応は十分である	71.59	38.2
2. 学習を支援するための OHP/OHC の使用やビデオ教材は十分である	90	78.2
3. 図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲であり私の学びをサポートしている	81.4	87.3
4. 自己学習室・アツルームは利用しやすい仕組みになっている	74.3	75.9
5. 教育方針は明確に述べられ、公表されている	82.8	78.2
6. 学生部によるサポート（個別相談、進路相談など）は利用可能で役立つ	57.2	58.2
7. 学生はカリキュラムに対して評価する機会が与えられている	88.6	92.8
8. 教職員は学生の関心事に耳を傾け、近づきやすい存在である	82.9	92.8
9. 全体的に見て、本学の学生として経験したことは肯定的にとらえている	95.7	100.0

表6 教員の担当科目状況の評価の平均値

評 価 内 容	2004年度 (N=29)	2000年度 (N=31)
1. 担当科目数が多かった	2.31	2.29
2. 担当した講義・演習時間数が多かった	2.41	2.42
3. 実習担当時間数が多かった	3.14	3.2
4. チームティーチングのための教員間の時間調整が難しかった	2.79	2.54
5. チームティーチングで得ることが大きかった	3.0	2.67
6. チームの話し合いに積極的に参加できた	3.04	2.96
7. 講義・演習・実習の重なりがあり、時間調整が難しかった	3.1	3.15
8. 講義・演習・実習に関して仕事量が多かった	2.86	3.23
9. 講義・演習・実習に関して負担感があった	2.52	3.0
10. 自分が担当した科目について、全体としてやりがいがあった	3.31	3.23

表7 教員のカリキュラムに対する満足度

	全 体	教 授	助 教 授	講 師	助 手
2000年度(N=29)	5.72	6.67	6.0	4.75	5.50
2004年度(N=29)	5.62	5.63	6.0	5.00	5.86

ることができる」「18：継続学習の必要性を感じ、自己研鑽しようと思っている」「13：看護職としての倫理観を持ち、対象者を擁護することができる」「2：人々に共感をもって接することができる」「5：物事への関心を深めることができる」などであり、反対に認識の低い項目は、「17：保健医療・福祉システムの中で責任を担うことができる」「16：国内外の社会や経済の動きを敏感に捉え、看護への影響を考えることができる」であった。2000年度の卒業生と比較すると²⁾、1番の項目以外すべての項目が上昇している。

カリキュラム全体に対する満足度は表3のようであり、全体に高い値を示していたが、唯一教養科目のみ低い値であった。この満足度についても、1999年度（2000年度も調

査を行っているが平均値が明瞭な1999年の値を使用)³⁾より、基礎科目、専門科目、実習科目群とも上昇しており、施設や行事などの評価も高くなっている。

表4は授業全体に関する評価である。“とても当てはまる”～“まったく当てはまらない”の5段階評価のうち、“どちらともいえない”を除き、“まったく当てはまらない、あまり当てはまらない”を“当てはまらない”に、“とてもあてはまる、まあまあ当てはまる”を“当てはまる”として、その割合を表した。「一般教養的な授業

表8 卒業生の上司による特性評価の平均値

評 価 内 容	2004年度 (N = 9)	2000年度 (N = 20)
1. 人間愛の精神に基づいて、さまざまな文化背景の人々を理解する態度をもっている	3.11	3.47
2. 人々に共感をもって接することができる	3.44	3.2
3. 自己を見つめることができる	3.00	3.05
4. 自律的に行動することができる	3.11	3.21
5. 物事への関心を深めることができる	3.11	3.42
6. 幅広く学問を探求できる	2.89	2.9
7. 批判的に物事を考えることができる	2.56	2.58
8. 対象の状況を判断し、ニーズを把握できる	2.89	2.8
9. 対象の状況に応じた援助を計画できる	2.78	2.79
10. 看護学および他領域の学問・研究の知識・技術を活用し実践できる	3.11	2.58
11. 自分の看護実践の過程を評価できる	3.00	2.75
12. 看護職としての倫理観を持ち、対象者を擁護することができる	3.11	2.95
13. 看護実践やその他の活動において必要なリーダーシップを発揮できる	2.56	2.58
14. 看護実践やそのほかの活動に、責任を果たすことができる	3.00	3.21
15. 他のヘルスケアチームのチームメンバーと連携をとり、協働することができる	2.89	2.65
16. 看護実践やその他の活動を明確に記録し、情報を伝達できる	3.11	2.84
17. 委員会やプロジェクトの役割を担い、積極的に参加している	2.67	2.16
18. 他者からの指導や助言に適切に対応できる	3.44	3.1
19. 日本および国際社会において看護の機能と役割を広い視野で多面的にとらえることができる	2.33	2.21
20. 保健医療・福祉システムの中で責任を担う姿勢を持つことができる	2.56	2.58
21. 継続学習の必要性を感じ、自己研鑽に勤めている	3.00	2.95
22. 職能団体や学会に積極的に参加している	2.11	2.16
23. 看護の専門職性および看護学の発展に寄与しようとする意欲をもっている	2.78	2.79
全 体 平 均	2.89	2.82

が充実している」「語学教育が充実している」「情報処理関係の教育が充実している」「選択できる授業科目が豊富である」は、“当てはまらない”としている割合が3割以上の学生に見られている。情報処理関係の教育については、2000年度より“当てはまらない”と回答した割合は低くなっていた。また、1, 2, 3, 4, 8, 10の項目については、“当てはまる”とした回答が2000年度よりさらに高くなっていた。

表5は教育支援の状況に対する評価である。“強くそう思う”～“強くそう思わない”の4段階評価を、“そう思う”～“強くそう思う”を肯定的評価としてみても、「全体的に見て、本学の学生として経験したことは肯定的にとらえている」「学習を支援するためのOHP/OHCの使用やビデオ教材は十分である」は評価が高く、「学生部によるサポートは利用可能で役立つ」は低い項目であった。学生部のサポートは2000年度とほぼ同様な結果であるが、コンピュータルームの故障に対する対応については肯定的評価が倍近く上昇しており、これはTAやSEによるサポートの効果であろう。

回答のあった70名中33名がカリキュラムに関する自由記載を行っていた。内容は分散していたが、比較的多く記載されていたことは、全学年を通して忙しい時期とゆとりのある時期の格差がある、早い時期から臨床体験をしたい、語学教育の充実を希望、国家試験対策の要望などであった。

2. 教員による評価

教員による担当科目の状況について、平均値を表6に示した。2000年度と比較すると⁴⁾、担当科目数の多さやチームティーチングのための時間調整の難しさについては平均値が高くなっていた。チームで行うことで得ることや積極的な話し合い、全体としてのやりがいについては上昇しており、仕事量の多さや負担感は減少していた。教員の満足度は表7に示したが、10点中5.6点であり、前回より0.1ポイント下がった結果であった。前回高かった教授の満足度が低下し、講師や助手の満足度は上昇していた。

29名中14名の教員がカリキュラムに関する意見を記載していた。その内容は、実習期間中の講義の大変さや人材・マンパワーの不足が最も多く記載され、実習と科目との連動がない、講義と実習との枠組みが異なっている、大学院の教育・研究指導の重複、カリキュラムの運用上の問題や理念に関する指摘なども記載されていた。

3. 卒業生の上司による評価

上司による評価回答者は9名であったが、卒業生の指導担当者（プリセプターなど）が最も多く6名であった。卒業生の特性に関する平均値は、表8のようであった。認識の高い項目は、「2：人々に共感をもって接することができる」「18：他者からの指導や助言に適切に対応できる」であり、低い項目は「22：職能団体や学会に積

極的に参加している」「19：日本および国際社会において看護の機能と役割を広い視野で多面的にとらえることができる」であった。回答者がわずかではあるが、今回の平均値は前回の平均値⁵⁾とほとんど同じであり、卒業生としての特性に大きな変化はない結果であった。項目7, 13, 17, 19, 20, 22については、前回同様低い値であり、卒業1年目では評価することが困難な内容であると指摘されている。

V. 考 察

卒業時の学生の評価を、前回の総括評価結果と比較してみると、専門科目、実習科目群の満足度が高く、学習環境（図書館、コンピュータールームなど）や教育支援についても肯定的評価が高くなっていった。また卒業時の特性においても、1番の項目のみ下がり他の項目はすべて上昇している。2004年度に卒業した学生は、全体的に本学のカリキュラムに満足していたといえるだろう。しかし、一般教養科目、語学教育、情報処理関係への評価は前回同様低く、改善を要す科目群であった。本学の教養科目は選択科目が多く、立教大学の全学共通カリキュラムとの単位互換も行っているが、学生の満足が低いのは、時間割上教養科目が重複しており、十分な選択の機会が与えられていないことなども要因と考えられる。

学生の要望に合った全体の科目配置のバランスや専門科目の早期導入などに関しては、前回のカリキュラム総括評価を受けて一部改正も行っている（調査対象の学生には適応されていないが）。また施設などの学習環境については改善による評価が示されおり、今後は提供する教育内容の質の向上を目指していくことも課題であろう。

教員の評価では、10年経て多くの科目で領域を超えたチームティーチングを行っており、そのよさを認識している反面、調整の負担感がみられている。また負担感よりやりがいがあったとの回答が高く、教員のカリキュラムに対する姿勢を反映している結果であったといえるだろう。しかし、教員の満足度は下がっており、マンパワーの問題などの背景もみえるが、より問題の所在を分析・明確化し、現在維持されているやりがいを低下させることがないように早急に検討されることが望まれる。

卒業生の上司による評価では、回収数の少なさが問題である。前回も少なかったが今回はさらにそれを下回った。卒業生を介しての間接的な方法では、学生が対象となる上司に評価の趣旨を理解していただいた上で渡しているかどうか、上司らがこの調査に関心をもって回答してくれているかどうか不明であるため、調査方法の限界があると思われる。今後、この卒業生の特性について調査を継続するのであれば、調査方法について十分検討した上で進めることが必要であろう。

VI. まとめ

カリキュラムの総括評価の一部として、2005年3月に実施したカリキュラム評価の結果について述べた。全体的に卒業時の学生のカリキュラムに対する満足度は高く、教員の満足度が低いことが明らかになった。現在のカリキュラムは1995年に開始し10年が経過した。2回の総括評価において学生からは、教養科目群の検討課題は残るものの、おおむね満足のいくカリキュラムであるとの評価を得ることができた。現在も部分的にカリキュラム改正を行っているが、これまでの評価からは、カリキュラムの主要概念や理論的枠組みはそのままとしても、カリキュラムデザインや教授方法などを具体的に見直す時期にきているのではないかと考える。今回の総括評価の結果を活用し、さらなる質の高いカリキュラムになるよう検討していきたい。

引用文献

- 1) 小山真理子他. 聖路加看護大学におけるカリキュラム評価. 聖路加看護大学紀要. 26, 2000, 123 - 132.
- 2) 小澤道子他. 卒業時の学生によるカリキュラム評価の推移 1995～1997年度入学生. 聖路加看護大学紀要. 28, 2002, 39 - 49.
- 3) 小澤道子他. 卒業時の学生によるカリキュラム評価. 聖路加看護大学紀要. 26, 2000, 133 - 143.
- 4) 2001年9月カリキュラム総括評価会：教員によるカリキュラム評価資料より
- 5) 2001年9月カリキュラム総括評価会：卒業後の上司による評価資料より